陳舜臣さんを語る会通信

NO.130　Dec.　2024

発行　兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel.078-911-1671
編集　「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日　2024年12月1日
http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/

陳舜臣さんの父・陳通(1896-1971)ってどんな人？

本号の編集に際して、陳來幸先生の論文ほか、学術論文や発表用資料を使用させていただきましたが、使用の仕方、論理の繋ぎ方等にお気付きの点がございましたらご指摘願います。　（編集委員　橘雄三）

1. 台北「西村商店」職員　1919年、25歳の頃 → 神戸の本店へ

以下、陳來幸論文「帝国崩壊後の在日華僑と在日台湾人：神戸泰安公司陳通ファミリーを中心に」及び報告用PPより引用します。なお、陳來幸先生は陳舜臣さんの弟・仰臣氏の長女です。下線及び※は編集委員の加筆。

はじめに

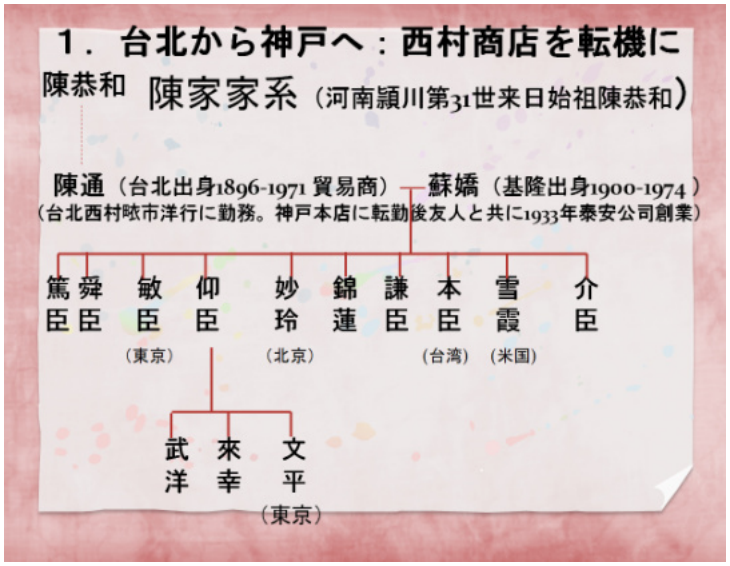
泰安公司創設者陳通は台北州新荘に生まれ、台北で海産物を扱う日本人が経営する西村商店で働いた。1919年頃、西村商店の神戸本店に呼ばれて神戸に移り住み、以後この地に根を下ろし10人の子供に恵まれた。次男舜臣（1924-2015）は日本の文学界で認められる作家となり、筆者の父である四男仰臣（1928-1998）が父陳通の家業を継いで泰安公司代表となり、現在はその長男武洋（1955-）が三代目代表を務めている。閩南（金門）商長崎泰益号の陳家、同じく閩南（金門）商神戸復興号の王家、台湾商怡利号蔡家、台湾商川泰号葉家、台湾商大信実業黄家とは直接・間接の関係がある。本論では陳家が子女の通婚を通じて閩南語圏商家のファミリーネットワークを強化し、相互に華僑社会において一定の発言力を確保した点に注目する。一方、陳家のファミリーメンバーの多くが大陸パスポートを保持する道を選択し、北京政府との関係改善に尽力した神戸華僑聯誼会（現在北京政府との関係を保持する神戸華僑総会）や1972年の日中国交回復後北京政府と良好な関係を持つ神戸中華同文学校の維持発展に密接に関わった。

一　台北から神戸へ：西村商店を足がかりに

祖父陳通（子達、旧名登通）は1896年４月15日に台北州新荘郡（現新北市）新荘街に陳恭和と張数の長男として生まれた。公学校卒業後一時台北工業講習所（1912年創設。台北州立台北工業学校/現国立台北科技大学の前身）に籍を置いたが、都合により中途退学の後は漢学を修めたとされる。その後日本人が経営する西村畩市商店に職員として雇われ、若くして単身神戸に渡った（※１）。爾来神戸の西村畩市商店に10数年サラリーマンとして働いた。漢文による商業通信文の能力が買われての雇用であり、初めは台北支店に勤務していたときく。店主に認められてのことであろう。西村商店の本店がある神戸へ転勤することとなり、神戸にやってきたのは　1919年、25歳の頃であった。　※１　他の家族は陳舜臣さん誕生の直前に神戸へ

おわりに

また、1953年の長女（※２）の「帰国」が、その後の祖父の泰安公司の経営方針、つまり「愛国商社」としての生き残る路線を採ることとなった。　※２　妙玲さん

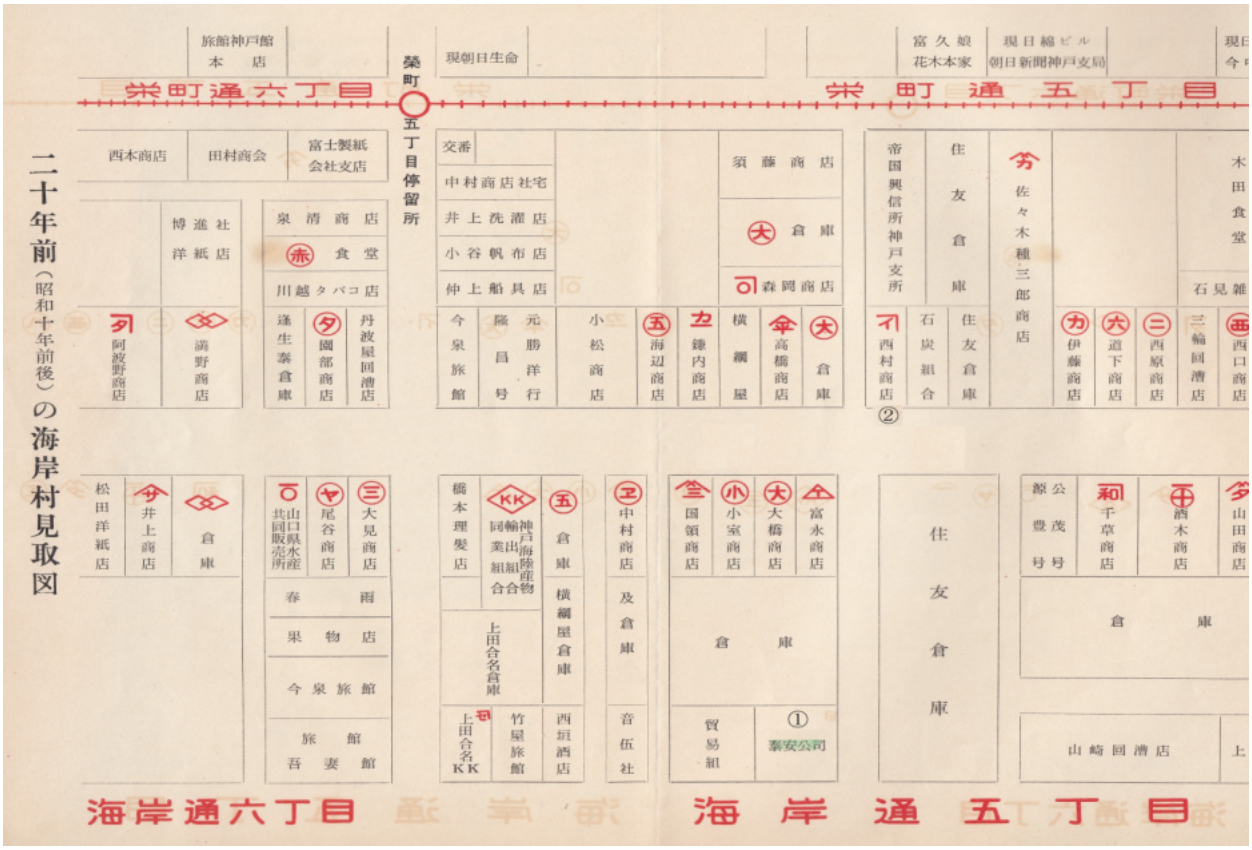


2020年度国際日本文化研究センター国際研究集会報告用PP（陳來幸先生作成）

追谷墓地にある陳家の墓　潁川の文字が大きく刻まれている。裏面に陳恭和三十一世とある

2.1933年「泰安公司」創立

泰安公司の最初の社屋（いわゆる「三色の家」　地図の①）、続いて戦後の泰安公司社屋の順に見ていきます。下の地図は昭和31年発行『神戸海栄会会報　第三号』「二十年前（昭和十年前後）の海岸村見取図」（部分）です。

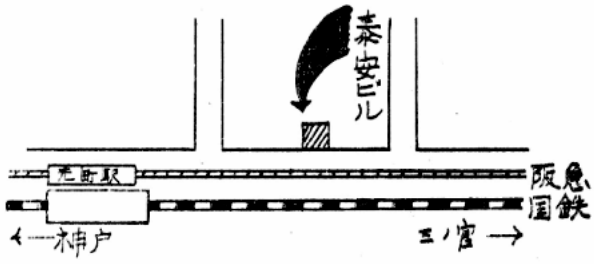


左の地図の②は父・陳通が、かつて勤めていた西村商店です。集英社『陳舜臣中国ライブラリー㉚』「年譜」p.749に「神戸の栄町通五丁目」とあります。数字①②は編集委員の加筆。

《 1.『泰安公司』概要 》朱傍線は編集委員加筆

泰安公司

名称	泰安公司 TAIAN TRADING CO.
住所	神戸市生田区北長狭通三丁目九ー八 泰安ビル三、四階
電話	神戸（33）一一八四、四四九五番
電略	THE TAIAN コウベ」タイアン
組織	個人
資本金	一五〇万円
決算期日	
年間取扱高	約二億円
役員氏名	
代表者	陳　通（明治二九年四月一五日生）
創立年月日	昭和八年七月
従業員数	五名



《2．現「泰安公司」社長、陳武洋氏の話 》

泰安公司の現社長は、舜臣さんの弟・仰臣氏のご長男です。（2020年7月、電話にて取材）

「祖父・陳通は海岸通りの社屋が空襲で焼けた後、北長狭通３丁目のこの地に平屋を建て、会社を移しました。舜臣伯父と父・仰臣、ほか数人の社員が仕事をしていたのはこの時代です。

やがて、舜臣伯父は作家へと道を変え、家業を継いだ父・仰臣は、この地にビルを建設しました。いまの４階建て泰安ビルです。一昨年、竣工50年を祝いました」

従って、戦後、陳舜臣さんが家業を手伝った頃の社屋は木造でした。

木立の右が泰安ビル

3.神戸の華僑社会で信頼され、当てにされた陳通氏「神戸武夷登山会」の創立者の一人

このとき、陳舜臣さんは12歳です。集合写真の前列に坐っているかもしれません。また、「登山会」創立者の一人、父・陳通氏はどこでしょう？

武夷登山会 創立一周年紀念大会（1936年 於:再度山天狗屋茶店前）

《1.「神戸武夷（ぶい）登山会」のこと》

福建出身の華僑は多い。二世、三世も、親たちから武夷の名勝をきかされている。六甲山系の山を背にした神戸でも、戦前、華僑が登山会をつくったとき、それに「武夷登山会」という名をつけた。私の父もその会長をしたことがあるが、武夷は福建出身の人にとっては、あこがれの山だったのである。」（『茶事遍路』より。下線は編集委員の加筆）

陳舜臣氏ご自身、**「台湾に移るまえは、福建の泉州。そのまえ、つまり陳姓の故地は河南の潁川（えいせん）です。祖父の墓には三十一世とあり、ぼくらの代は三十三世になります」**（『宝石』昭和38年９月号掲載「ある作家の周囲―陳舜臣篇」）とおっしゃっています。

神戸武夷登山会は、1935年4月創立で、陳通氏も創立者の一人です。

なお、神戸武夷登山会の会員資格ですが、同会の『満60周年(1935-1998)記念会報』(1999年発行)掲載の会則を一部分、下にあげます。

第二条　本会の署名所は再度山『稲荷茶屋』『灯籠茶屋』に置く。
第六条　会員の義務
１．会員は毎日一回登山し所定の備付けの署名簿に署名をする。但し代筆は無効。

燈籠茶屋（2020年11月 編集委員撮影）
陳舜臣さん生誕100年の2024年2月18日をもって閉店

《2.「作家陳舜臣先生 直木賞受賞祝賀会」》

於:再度山灯籠茶屋前　1969.2.2 撮影
前列右から陳徳仁氏、父・陳通氏、ご本人。立っている人、左から3人目、弟・仰臣氏。最後列中央、林同春氏
神戸武夷登山会『三十週年紀念刊』(1969)

4.戦後、大陸と台湾が対立する国際情勢が神戸華僑社会にも波紋
―― 父・陳通がえらんだ道

陳舜臣生誕100年記念展　パネルNO.11**「植民地期に日本へと渡った台湾人の戦後」**（神戸華僑歴史博物館運営委員　葉翔太）から抜粋・引用いたします。　（下線は編集委員の加筆）

【故郷台湾の混乱と冷戦の影響】

1947年、台湾で二・二八事件が発生し、台湾住民と台湾を新たに統治することになった国民党との間に軋轢が生じます。中国大陸では国共内戦が再開し、中国共産党が優勢となり、1949年に北京で中華人民共和国が成立し、12月には国民党が中華民国の中央政府を引き連れて台湾へと撤退します。これは在日華僑を政治的に二分させます。

1950年代、日本在住の台湾人の一部には、国民党に不信感を抱き、中華人民共和国に期待を寄せる人も少なくありませんでした。陳舜臣の神戸の家族も同様で、妹の陳妙玲は1953年に北京へと向かいます。1957年、神戸で中華人民共和国を支持する神戸華僑聯誼会（会長：陳義方）が発足した際、陳舜臣の父である陳通もメンバーとして活動を支え、1969年には会長に就任します。1949年に台湾から神戸に戻った陳舜臣もこうした時代の影響を受けていました。そして1972年の日中国交正常化以降、陳舜臣は「祖国」を中華人民共和国と捉え、日中友好の必要性に関しても「華僑」として積極的に発言をしていきます。

神戸華僑聯誼会について、戦後神戸華僑関係資料を読む会編『読資会報告書1　**戦後神戸華僑史の研究**』(2018)所載、安井三吉論文「**神戸華僑聯誼会史綱(1957-1976)**」から抜粋・引用いたします。

はじめに　(1)歴史的役割

神戸華僑聯誼会は、1957年2月、神戸華僑有志50余名によって呱々の声をあげるや、中華人民共和国支持の旗を掲げて活動を開始し、1976年9月、神戸華僑総会「正常化」によって新しく結成された神戸華僑総会と統一を果して発展的解消を遂げ、その歴史的役割を終えた。20年の短い歴史であったが、神戸華僑聯誼会は今日ある神戸華僑社会の基本的枠組みを形成するうえで中心的役割を果した。

(2)時代的背景

神戸華僑聯誼会が誕生した1957年は、中華人民共和国建国から10年にもならず、居住国日本は台湾の中華民国と国交を結んでいた時期であり、しかも毛沢東(1893-1976)と蒋介石(1887-1975)の最晩年の時期にあたり、中国は「台湾解放」、台湾は「大陸反攻(光復)」を叫び、相互に相手を「偽」・「匪」などと呼んで対峙していた時期であった。中国と台湾の敵対関係は、神戸華僑聯誼会の成立とその後の歩みを強く規定した。

また、神戸華僑聯誼会の歩みを規定していたのは、…、世界における中国、台湾の位置の在り方でもあった。このことを端的に表していたのは、国連における中国代表権問題の推移である。1945年の国連創設以来、中華民国が国連において中国代表の位置を占めていたが、1971年10月、中華人民共和国が替って代表となり、台湾の中華民国は国連から脱退した。このことは神戸華僑社会における神戸華僑聯誼会の位置を一挙に高め、神戸華僑聯誼会が留日神戸華僑総会に替って神戸華僑の代表を占めることとなった。

陳舜臣さんの人生に影響を与えた三つのこと

陳舜臣さんは昭和19年、東京へ行った。このときの東京行きで、忘れ難いことがあった。

神田の古本屋で、『斯諾・西行漫記』という中国語の本を買ったことである。じつはその『西行漫記』こそ、『中国の赤い星』(Red Star over China)の中国語訳だったのである。『西行漫記』を読んだとき、私は二十にすぎなかったが、興奮をおさえることができなかった。幾晩も睡れなかったことをおぼえている。

（『陳舜臣さんを語る会通信』No.114）

二つ目は戦後、台湾への帰郷中に台北で起こった二・二八事件です。陳さんは台北に近い新荘で銃声を聞きますが、**「その音とともに、同胞の命が一つまた一つと消えて行くことを、そのとき実感できなかったことにたいして、私はいまでも罪悪感をもっている」**（『道半ば』p.245）と述懐しています。

三つ目は、父・陳通氏の背中だったのではないでしょうか。

貿易會社「泰安公司」の経営に多忙であった父・通とそれをたすけた母・蘇嬌
『道半ば』(2003 集英社 p.11)